トヨタ財団レポート
THE TOYOTA FOUNDATION REPORT
Mar. 1981 No. 13

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F(〒160)
TEL. (03)344-1701～3

第23回理事会開催

昭和56年度事業概要を決定

トヨタ財団では3月18日，第23回理事会を開催，昭和56年度の助成事業の概要が決定されました。助成総額は4億8,000万円で，その内訳は下表の通りです。

なお今回の理事会で，本年度より事業助成として新たに東南アジア諸語を対象とした辞書編纂出版助成の開始(→P4)，及び「身近な環境を見つめよう」研究コンクールの実施(→P3)が決定されました。

下表の昭和55年度助成額のうち，研究助成成果発表等助成9件分，国際部門助成9件分，翻訳出版促進助成4件分は今回の理事会において承認されたものです。

●研究助成・事業助成の公募開始

理事会における昭和56年度事業計画の決定に基づき，財団事務局では4月1日より研究助成・事業助成の公募手続を開始します。

研究助成は，「交通安全，生活・自然環境」「社会福祉」「教育・文化」の3領域及び特定課題「地域社会の変化に関する実証的研究」を対象として行うもので公募期間は4月1日より5月31日までです。

事業助成は，「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成と，東南アジア諸語辞書編纂出版助成の2件で，公募期間は前者が4月1日より10月31日まで，後者は4月1日より6月15日までです。

なお，研究助成のうち成果発表等助成は，当財団で助成を受けた研究の成果発表に対してのみ助成が行われます。また国際部門助成は，外国人(特に東南アジア諸国)を対象として助成が行われます。フェローシップ助成は，国際文化会館が運営する社会科学国際フェローシッププログラム(通称新渡戸フェロー)に対し助成を行うもので，フェローに関するお問い合わせは国際文化会館企画部(Tel.470－4611内228)までお願いいたします。

トヨタ財団では，他からの資金援助の得にくいもので，かつ社会的にも学術的にも有意義な活動を巾広く支援できればと考えており，そのような応募をお待ちしております。なお応募用紙のお申し込みは官製ハガキにて財団事務局の各担当助成係あてお願いします。折り返し応募要項等をお送りいたします。

●環境科学をテーマに2回の報告会開催

環境化学物質の超微量分析をテーマとした第9回報告会，社会科学的側面から環境問題を扱った第10回報告会がそれぞれ1月31日，3月14日に東京で開催されました。いずれも巾広い社会的関心がもたれ有意義な会となりました(→P6)。なお，第11回報告会は「地域社会に根ざした保健・医療を考える」をテーマに3月28日に，第11回報告会は「海外の日本人とその子供たち」をテーマに6月29日に開催予定です。

昭和55年度助成額及び昭和56年度助成計画額

項目	昭和55年度助成額(千円)		昭和56年度助成計画額(千円)
1．研究に対する助成		303,291	310,000
○研究助成	95件 279,770		280,000
○成果発表等助成	17件 23,521		30,000
2．事業に対する助成		40,673	50,000
○国際学術研究集会助成	10件 10,213		――
○翻訳出版促進助成	10件 30,460		30,000
○辞書編纂出版助成	―― ――		20,000
3．国際部門助成	17件	63,030	90,000
4．フェローシップ助成	1件	25,000	20,000
5．研究コンクール	14件	42,000	10,000
助成金総額		473,994	480,000

プロジェクトへの助成か人への助成か？

トヨタ財団プログラムオフィサー
山岡義典

当財団の研究助成は基本的にはプロジェクトに対する助成である。その選考も研究計画の中味によって行われる。研究テーマは学術的・社会的に十分意義のあるものかどうか，研究方法は独創性があり目的に照して適切であるかどうか，このような研究に対して他からの資金援助は得難いかどうか，等々のことが選考委員会で論議される。

しかしこれらの他に選考において特に重視してきていることがある。それは，その研究活動に助成することによって，どのような研究者が生れ，育ち，成長していくか，という点である。このことは必ずしもこれまで一般的に正面きって論じられたことはないし，当財団の応募要項にも明確に表現しているわけではない。しかし民間財団の助成のあり方として極めて重要な視点ではないかと思う。民間財団の助成が国や企業の委託研究や助成研究とは質を異にする点があるとすれば，まさにこのよううな「人への助成」という点においてではないだろうか。

★　★　★

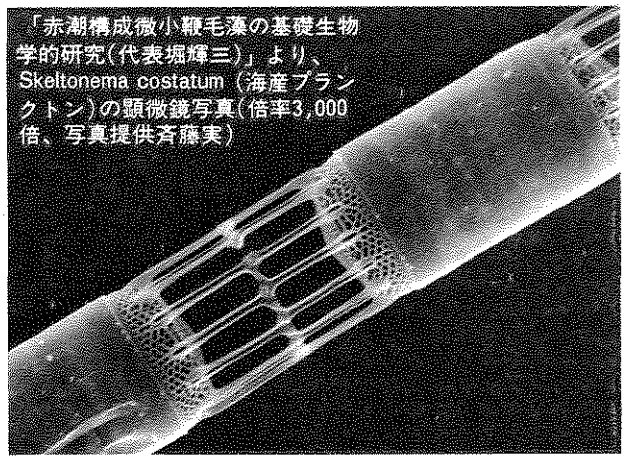
上記のような考えからすると助成対象者はすでに学界や社会で実績の認められた研究者というよりも，むしろ海のものとも山のものともつかないが多くの可能性を秘めた若手の研究者をより優先させるのがふさわしいということになろう。ここ数年，助成対象者に若手研究者の進出が目立っているが，一つにはこのような考えが背景にあると言える。勿論，著名な実績のある研究者が代表者である場合にはその点でふさわしくないかといえば，そうとも言えまい。優れた指導力のもとに若い研究者が思いきり能力を発揮し得るような研究プロジェクトも多いし、これまである分野で実績をあげてきた人が全く新しいテーマに挑戦しようという場合もある。そのような意味も含めて、未知数の研究者が一歩飛躍するための時機を得た助成というものが重要なのではないかと思う。

しかし「人への助成」という点から考えると今の研究助成プログラムには大きな制約と限界がある。研究者本人のための人件費が出ないこともその一つであろう。一時期現在のあらゆる職務から解放されて，ある研究に没頭するということが重要な場合もあろうが，今の研究助成ではそれが難しい。また研究計画に縛られることなく自由に試行錯誤を繰り返すというような本人の任意性による自由な研究活動も助成しにくい。従って，こういう「人への助成」を目的にしたものは別途に新たなプログラムを検討すべきであろう。今年から来年にかけて財団事務局ではこれまでの研究助成活動の総点検を行う予定にしているが，その点検の過程でこのような来るべきプログラムについても構想を煮詰めていければと考えている。このレポートの読者からも色々とアイディアや助言をいただければ幸である。

★　★　★

「人への助成」ということをやや強調したが，冒頭にも述べたように，この4月から5月にかけて一般公募する研究助成の基本的な主旨はやはり「プロジェクトへの助成」にある。「人への助成」ということにこだわりすぎると本当に重要な問題を見逃すこともある。誰がどのようなチームで実施しようと，現在の社会的状況の中で事柄として重要なものは助成対象としてとりあげるべきである。否，むしろ，実績と実力を踏えた研究チームであって始めて的確な切りこみが可能な課題というものも山積していよう。こういうことも忘れてはなるまい。

あれも重要，これも重要ではなはだ主旨の不鮮明な文章になったが，要はこのような助成というものに対して余りに明確にカッコ良く割り切ってはならないということであり，そのため私共プログラムスタッフは常に柔軟な問題意識をもっていなければならないということである。同時に民間財団における選考というもののダイナミックな性格の一端をいくらかでも理解してもらえればと思うのである。



「赤潮構成微小鞭毛藻の基礎生物学的研究（代表堀輝三）」より、Skeltonema costatum（海産プランクトン）の顕微鏡写真（倍率3,000倍、写真提供斉藤実）

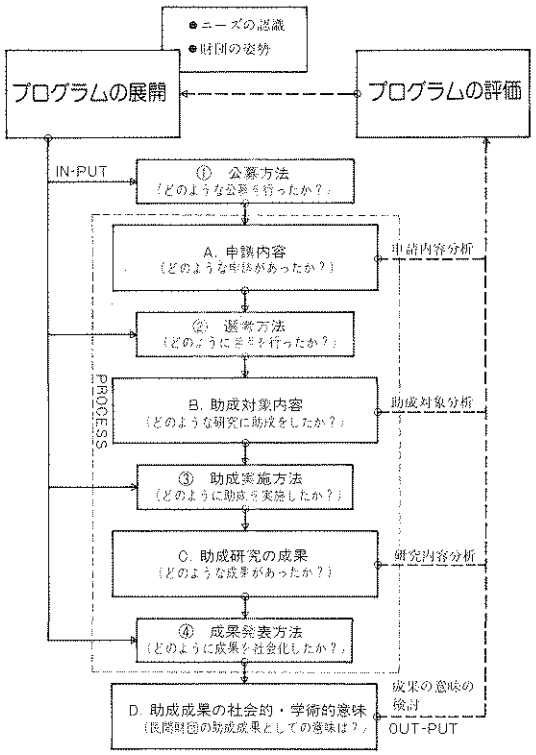
財団活動の評価をどう行うか

企業活動の評価は直接数字に現わすことも可能であるが，元来非営利を目的とする公益法人の場合，それをどう現わすかは非常に難しい。ましてや研究助成というような基礎的な活動の場合には，それを短期的に評価することは単に不可能というだけでなく，かえって誤りを犯すことすらあり得よう。

しかしそういうことにかまけて財団の行ってきたことに対し何の反省・評価もしないでいると，いつの間にか財団活動そのものが硬直化し堕落しかねない。公益法人の運営にはいつもそういう陥し穴がある。トヨタ財団ではとりあえずこれまでの5ヶ年の実績をもとに何がしかの評価・検討作業を試みることにした。少くとも，どういうプログラム展開（インプット）をしてどういう成果（アウトプット）が得られたかについての冷静な現状認識は必要であろう。作業の方法論については現在模索中である。方法論検討のための一つの基本図として研究助成の場合の業務の流れを整理してみた。右図がそれである。これを見てお気づきの点があればご教示いただきたい。

（山岡記）

研究助成プログラムの構造と評価作業の位置づけ



（予　告）

●研究助成　中間報告会

当財団は，研究者と財団の相互理解を深めると共に，研究者相互間の学術交流を計り，今後の研究活動・助成活動の展開に資することを目的として，昭和55年度の研究を対象に，次の通り中間研究報告会を行う予定である。

〈交通安全、生活・自然環境領域〉於：私学会館（市ヶ谷）
- ● 4月17日㈮　10：00～18：00
- ● 4月18日㈯　9：00～18：00

〈社会福祉領域〉　於：上智会館（上智大学内）
- ● 4月24日㈮　10：00～18：00
- ● 4月25日㈯　9：00～16：00

〈教育・文化領域〉　於：私学会館
- ● 5月15日㈮　10：00～17：30
- ● 5月16日㈯　9：30～15：00

〈特定課題〉　於：上智会館
- ● 5月22日㈮　12：30～18：00
- ● 5月23日㈯　9：30～13：00

なお，参加ご希望の方は，ハガキにてトヨタ財団研究助成係宛お申込み下さい。

●第2回〝身近な環境を見つめよう〟研究コンクール

財団設立5周年記念事業の1つとして，一昨年10月にスタートした研究コンクールは，昨年10月の理事会にて研究奨励賞（金賞6件、銀賞8件）が決定され，現在，2年後の研究奨励特別賞に向けて，更に研究が続行されている。

この研究コンクールは，専門の研究者と地元の関係者との共同による日常生活圏を対象とした研究活動を促進し，生活と密着した「身近な環境科学」の発展に寄与することを目的として行われているものである。当初，どの程度の関心が寄せられるのか若干危惧しながら試験的に開始したこの企画も，いざ蓋を開けてみると，全国各地から予想以上の応募が舞い込み，かなりの好評を得た。

そこで，今後この種の研究活動をより一層促進していくために，当財団は2年毎に公募を行うことになり，第2回目の応募を今秋10月以降受付ける予定である。具体的な内容・手順等については，前回にほぼ準ずる計画であるが，詳しくは，次号を参照されたい。

昭和56年度国際部門事業のご紹介

1．ビルマ文学を日本へ紹介

東南アジア諸国の文学作品や歴史書，社会科学書等を日本に紹介する「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成は，4月で4年目を迎えます。これまでに，インドネシアの本4件，シンガポール3件，タイ16件，フィリピン3件，マレーシア2件の合計28件が助成対象（翻訳料の助成）となり，このうち18件が既刊です。このプログラムに参加した出版者の数も増え，井村文化事業社，めこん(文遊社)，弥生書房，幻想社，刀水書房，九州大学出版会の6組織となりました。

昨年より対象国にビルマを加える準備をしていましたが，募集対象とするビルマの現代文学作品のリストもでき上り，4月から『ビルマを知ろう』を開始することになりました。このリストは，ビルマの作家10数人に相談して作成したものです。ビルマの人々は，このプログラムでビルマの本が紹介されることを聞いて大変喜んでおり，積極的に協力と応援をしてくれています。現代ビルマに暮らす人々の喜びや悲しみ，つらさや美しさが，リストにある本の中に結晶しています。

2．東南アジア諸語辞書編纂出版助成

「隣人をよく知ろう」プログラムの進行に伴って，東南アジア諸国の文学書や学術雑誌を読むための辞書の必要性が痛感されるようになりました。語彙数が2万語から5万語の規模の中辞典に焦点を絞って，その編纂・出版に対する助成を実施します。今回は東南アジア諸語のうち，インドネシア語，カンボジア語，タイ語，ベトナム語，マレーシア語の日本語辞書に募集対象を限定します。応募の条件として，辞書編纂のための単語カードの作成などの準備作業が，幾年か前から進行中であり，また，助成決定時から3年以内に辞書が出版できそうである，という点を特につけました。応募をご希望のチームまたは個人の方は，出版者と契約の上，ご申請下さい。助成金は1件当り，出版完了までの3年間で編纂作業費と出版経費を含めて1,500万円以下を目処とします。かなり編纂作業が進んでいるチーム（個人）を支援することが眼目です。

ビルマの古都ペグーのシュエモード・パゴダ

3．日本の文学作品や社会科学関係の著作を東南アジアへ紹介

「隣人をよく知ろう」プログラムが拡大して，東南アジア諸国が隣人日本を知るためのプログラムが始まることになりました。日本の文学作品等の東南アジア諸国語への翻訳は，従来、国際交流基金で行ってきていますが，当財団のこのプログラムの特徴は，原則として日本語から直接現地国語に翻訳を試みる，という点にあります。翻訳者も出版社も現地国の人々や組織となります。対象とする国は，タイおよびインドネシア（またはマレーシア）です。日本人の手になる日本についての社会科学関係著作，文学作品，日本人学者による東南アジア研究の成果が紹介される予定です。

4年前に始まりました日本向け「隣人をよく知ろう」プログラム（東南アジアの人々の著作を日本に紹介）に対して，東南アジア向け「隣人をよく知ろう」プログラムと呼べましょう。

この他に，東南アジア相互間の「隣人をよく知ろう」プログラムも，プログラムと呼べるようになるにはまだ何年もかかるかも知れませんが，芽がポツリポツリと育ちつつあります。

4．国際助成

主として東南アジア諸国の人々が東南アジアで行うプロジェクトに助成をしています。助成の領域は，環境，社会福祉，教育・文化，青少年の健全育成などですが，原則として，事業の資本金や建物，機関の一般管理費，研究者の人件費，等には助成を行いません。この数年の助成対象の傾向として，文化領域のプロジェクトが多く，東南アジアの地方大学における質のいいプロジェクトが増加しています。助成対象となるプロジェクト形態としては，研究，東南アジアにおける国際会議，翻訳，辞書編纂，雑誌編集等があります。問い合せおよび申請は，東南アジアの人々から直接，当財団の国際部門にしていただくことになっています。　（岩本記）

助成刊行物紹介①（隣人をよく知ろう プログラム）

「蝶と花」

ニッパーン著　星野龍夫訳

井村文化事業社刊（タイ叢書文学編10）A5 231頁 1,300円

この物語は，マレーシア国境に近く，タイの他の地域と違って回教徒の多い南部タイを舞台にして，14才の少年フージャンが，家族や教師や友人達の暖かい愛情に支えられながら，貧しさの中を逞しく生きていく姿を描いている。

フージャンには鉄道の荷役労務者として働く父と，幼ない弟と妹がいる。母は既に病死し，学校に通うかたわら母親の代わりとなって家族の世話をしている。鉄道の仕事が減り，父親の収入だけでは生活できなくなったことを知り，フージャンは学校をやめ商人になろうと考える。学校で，アイス・キャンデーを売ることから始め，やがて，タイ・マレーシア間の密貿易に関わり，米の担ぎ屋として一家の生計を支えることになる。

担ぎ屋を続ける間に，担ぎ屋仲間の少女ミンピーや少年達と友達になっていく。そんな仲間の一人，ナーカーがある日フージャン達の目の前で列車から飛び降り，自殺する。この事件で目の覚めたフージャンは，担ぎ屋をやめ，ミンピーと花作りの仕事を始めることを決意する。

作者ニッパーンはタイの若手作家の一人であり，1950年に南部タイのソンクラー県に生まれた。彼が師範学校を卒業し短編小説を書き始めた頃は，ちょうどタイ社会が激動し，学生革命から反革命に至る時期であった。彼も生まれ故郷で，マレー系住民のためにタイ語を教える私塾を開いたり，農業の指導を行ったりした。「蝶と花」はこの頃の作品である。「蝶と花」は1976年に「サトリーサーン」誌に連載され，78年の図書週間に出版協会賞を受賞した。その間，彼は編集の仕事に携わり，時々，東北タイや北部タイの農村の農民や児童に古本を配布するボランティア活動を並行して行ってきた。

この物語に描かれている，南部タイの貧しい人々の中で生きる少年の姿は，不思議に，私たちを救われた気持ちにしてくれる。それは，作者の登場人物を見つめるまなざしが優しいからだろうか。タイ社会の複雑な社会構造の生み出した貧困の中で，純粋に素朴に生きようとする少年のまなざしは，作者のまなざしそのものであり，それ故に，貧困を語る作者の言葉は説得力を持っている。

助成刊行物紹介②（隣人をよく知ろう プログラム）

「いばらの道」

シャーノン・アハマット著　小野沢　純訳

井村文化事業社刊（マレーシア叢書文学編1）A5 235頁 1,300円

この小説は、マレーシアの当代随一の作家シャーノン・アハマットの代表作であり，現代マレー文学の〝古典〟とも言われる作品である。

作者シャーノン・アハマットは，この小説の舞台であるマレーシアの稲作地帯ケダー州に生まれ，水田に囲まれたカンポン（村落）に育った。1933年生まれの作者は，中学校教師を続けた後，オーストラリア国立大学に留学，帰国後，マレーシア科学大学の教授となり，現在，同大学人文学部長の職にある。

物語は，マレーシアの稲作地帯の貧しい農民ラフマとジェハ夫婦を中心に展開される。彼らには17才の長女サナを頭に７人の娘がいる。厳しい自然と闘い，苦しく辛い農作業の日々が続く。そんなラフマの唯一の心の拠り所は，アッラーの神への限りない信仰である。そんな一家に突然の不幸が襲いかかる。一家の大黒柱であるラフマがちょっとした不注意で，ニボンの棘を足に刺し，傷が化膿してそれが因で死んでしまう。その時から一家の生活は一変する。夫に代わって必死に生活を守ろうとする母ジェハ。しかしその母も夫を失った悲しみと生活への不安で力尽きて発狂してしまう。ジェハは精神病院へ連れていかれる。残されたサナは，幼ない妹達を守って、厳しい自然と闘いぬいていかなければならない。日照り，大洪水，実った稲を襲ってくるスズメ，稲の茎を食い荒すカニの大群…。

やっと迎えた実り少ない収穫のあと，完全に発狂した母が帰って来た。苦しみばかり多い人生を，サナはこれからも稲作農民として生き抜いていかなければならない。

物語は，カンポンの稲作作業を丹念に描きながら，悲惨としか言い様のない一家の姿を綴っていく。しかし，作者の言わんとするのは，非力で貧しいマレー農民への同情でも，また政府の開発政策への批判でもない。それは，与えられた生き方を受け入れて忍耐強く闘いぬく農民への賛美であり，それを支えるマレー社会の伝統的価値観，すなわちアッラーの神への絶対的信仰の姿である。マレーシア農民の生活にも、イスラム教徒の信仰にも疎い私たちにとって本書は貴重な1冊であるといえよう。（牧田）

活動報告

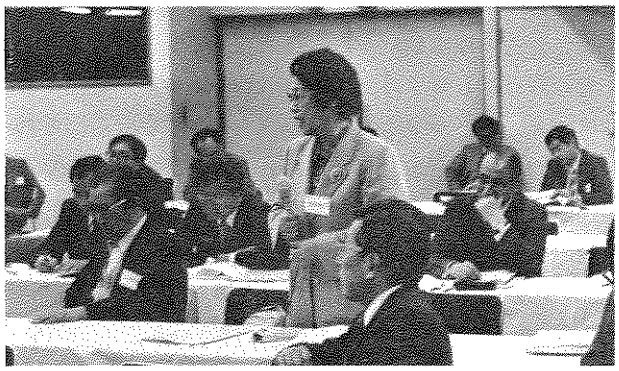
助成研究報告会

●第9回報告会

テーマ：「環境化学物質の超微量分析」
　　—国際共同研究による地球規模変化の把握—
日　時：昭和56年1月31日(土) 1:20～6:00PM
場　所：東京都港区六本木 国際文化会館
プログラム：
　研究報告1．大気中の超微量有機ハロゲン化物の分析ならびに地球環境における挙動に関する研究
　　代表者 東京大学理学部教授　富永　健
　研究報告2．近代社会の発達が地球規模自然環境の重金属のバックグラウンド濃度に及ぼした影響評価
　　代表者 室蘭工業大学工学部教授　室住正世
　質疑及び関連討論
　　司会　東京大学理学部教授　不破敬一郎
　　コメンテーター
　　相模中央化学研究所主任研究員　安部美津子
　　岡山大学温泉研究所所長　酒井　均
　　北海道大学水産学部助教授　角皆静男
　　気象研究所高層物理研究部長　三崎方郎

今回報告された2件の研究はそれぞれ，大気中の有機ハロゲン化物の濃度と海水中の鉛，カドミウム等の重金属の濃度とを超微量分析の技術を駆使して明らかにし，さらに長期的な観測を通じてこれら物質の濃度の変化をとらえようとするものである。

第9回報告会討論風景



有機ハロゲン化物は，スプレーや冷蔵庫の冷媒などとして用いられ，一般にはフロンガスの名で知られているが，このガスが紫外線のフィルターとして働いている成層圏中のオゾン層を破壊すると予想されるため，最近各国で使用規制が行われている。一方，重金属のうち鉛を例にとると，自動車のアンチノック剤として四アルキル鉛が使用されるようになってから大気中に放散される鉛の量が飛躍的に増加したことが，グリーンランド氷雪のボーリング調査から明らかになっている。いずれの場合も，人類の活動によって徐々に環境が変化しつつあることを示しているといえよう。

このような環境変化が人類に壊滅的打撃をもたらさないよう監視するためには，基礎データとしていわゆるバックグラウンド濃度を知ることが重要になってくるが，対象となる物質が ppt ($=10^{-12}$) という超微量であるため，分析技術の点で非常な困難を伴う。しかし，それぞれの研究では，サンプリングから分析まであらゆる過程で生じうる，分析器具それ自体からの異物の混入などさまざまの妨害要因を排除し，ppt オーダーで再現性の高い分析データを得ることに成功した。

以上の報告に基づき後半では，フロアーの参加者もまじえて活発な質疑・討論が行われた。この討論の中で指摘された一つの問題点は，両研究で用いられた分析手法はいずれも非常に精密高度なもので，今後どうすればこの分析・観測を各地のモニタリングステーションでルーチンワークとして続けていけるような簡略化した形にできるかという点であった。これに対して報告者からは，分析対象物質の限定などによってある程度分析の簡略化は可能であろうとの示唆もあったが，いずれにせよ，両研究とも今後公的な機関によって継続発展させるべき課題を多く含んだ研究といえよう。　(久須美)

●第10回報告会

テーマ：「環境問題への社会科学的アプローチ」
　　—海岸開発と海域保全をテーマとして—
日　時：昭和56年3月14日(土) 10:00～18:00
場　所：東京都港区六本木 国際文化会館
プログラム：
　研究報告1．不知火海環境汚染に関する学際的総合調査

代表者　不知火海総合学術調査団　色川大吉

研究報告２．アジア・西太平洋地域における開発に伴う人間環境問題と環境法に関する国際共同研究

代表者　人間環境問題研究会　加藤一郎

招待報告　タイにおける海岸開発と海域保全

報告者　タイ・チュラロンコン大学
海洋学部教授　スラポン・スダラ

討　論

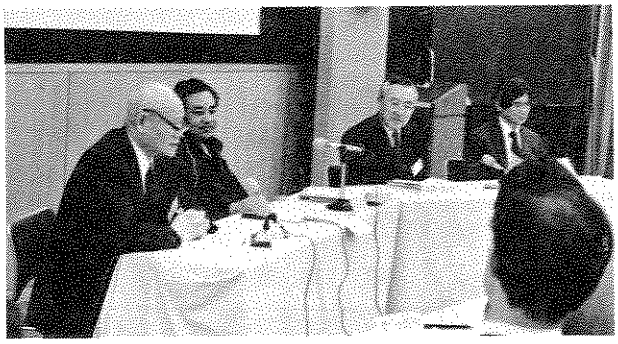
司会：　大阪大学社会経済研究所教授　稲田獻一

討論者：色川大吉，加藤一郎，スラポン・スダラ

日本や発展途上国において「ミナマタ」の悲劇を二度と繰り返さないために必要な社会的対応として，一つは市民運動等による下からの対応があり，一つは法や制度の整備による上からの対応があろう。今回の討論では，いわばこの二つの対応の可能性と意義というものが論点だったように思う。「環境教育」や「環境科学」といわれるもののあり方もどちらに重点をおくかによってその内容や方法が変ってくる。

従来，両者の考えはそれぞれの分野内でのみ議論されてきたきらいがある。しかし発展途上国における実情を考えると，法の整備にのみ頼って，そのことが下からのエネルギーを抑えこむことになってはならないし，又，下からの盛りあがりがあるまで上は手をこまねいて待っているというのでは問題は更に拡がるだけであろう。上からの対応と下からの対応とが車の両輪となって悲劇的な事態を未然に防止できるような社会的仕組みが必要ではなかろうか？　今回の報告と討論が，そのような社会のあり方を考えるための第一歩の機会としての意味を持ち得ればと思う。　（久須美）

第10回助成研究報告会，討論場面（写真は左から稲田獻一、スラポン・スダラ、加藤一郎、色川大吉の各教授）



○第12回報告会のご案内

テーマ：海外の日本人とその子供達――アメリカと東南アジアの在留邦人の生活を通して――

日　時：昭和56年６月27日㈯PM1:00～6:00

場　所：神戸市生田区海岸通／兵庫県農業会館ホール

プログラム：

研究報告

１．アメリカ文化との接触が日本人の家庭生活と子供の社会化過程におよぼす影響

岡山大学法文学部助教授　箕浦康子

２．日本人の異文化適応に関する文化人類学的研究――東南アジアにおける在留邦人子女の教育の諸問題を中心として

福岡教育大学教育学部教授　江淵一公

九州大学教養学部助教授　小野沢正喜

討　論：「海外体験と人間形成」

司会　京都大学教育学部教授　小林哲也

（他討論者として４～５名を予定）

最近，海外帰国子女の現状について新聞に連載されたり，各地でシンポジウムが開催されるなど，社会的関心も高まってきているようである。その中で一般には，帰国子女の日本への適応・再適応という観点から問題が論じられ，とりわけ教育の場面での不適応現象などが大きくとり上げられているように思われる。しかし，日本の現状を固定的にとらえるのではなく，日本の教育体制，ひいては日本の文化を世界の中で相対化してしまって，むしろ人間が特定の文化・言語をこえた所で育つとはどういうことなのかといったより広い視野から問題を考えることが必要なのではないだろうか。

今回の報告会はこのような主旨から企画されたもので，報告１は，日米両文化にまたがって成長した子供の人格形成の問題を心理学的立場から長期的な追跡調査を通じて明らかにしようとするもので，報告２は東南アジア在留邦人の生活の実態，コミュニティ形成の歴史などを文化人類学，社会学的立場から調査したものである。いずれも異文化の中での子供の成長を考える上での基礎的な知見をもたらす研究である。後半の討論ではこれをふまえて海外体験の意味を論じる。

読書案内――「公益法人と公益信託」(田中實著)

フィランソロピー活動を理解するための必読書

「フィランソロピーって何ですか？」とよく聞かれる。私も今の財団に勤めるまでは全く聞いたことがなかった。philanthoropy, 辞書で見ると博愛・慈善又はその行為・事業・団体のことと記されている。もう少し分り易く言えば，民間の公益的助成活動ということであるが，日本の社会では未だこのような活動が市民社会を成立させるための不可欠の一定領域であるという認識はない。従って「フィランソロピー」という言葉も定着していないし，これに代る日本語も見出されていない。「フィランソロピーって何ですか？」と聞かれた時，「これを読んでみて下さい」と言える格好の書物が現れた。ここにとりあげた田中實教授の「公益法人と公益信託」である。雑誌「公益法人」に連載中から断片的には目を通していたのであるがこうして一冊にまとめられたものを一気に読んでみると日本の公益活動の現状と問題点あるいはその貧困さが極めて具体的に理解できるのである。

第１章の序説では明治以降の日本の公益活動の展開が概観される。第２章では日本の公益活動の原点とされる秋田感恩講についてその成立過程とさまざまな問題の発生について詳述されている。第３章ではイギリス・西ドイツ・フランスの公益活動について紹介され，第４章ではアメリカのそれについて紹介されている。第５章では前章までの事実認識を踏えた上での日本のこれからの公益活動のあり方について展望されている。

時代や国によってその社会組織がちがうように公益活動についての考え方や内容も実に様々である。しかしこのような公益活動を支えた底流には共通のものがあるように感じる。恐らくこれからの日本にはその社会にふさわしい形の公益活動が展開されるべきであろう。形だけ見た場合にアメリカやイギリスの実例がどれだけ参考例として役立つかは一概には言えない。しかしその底流にあるもの，即ち，基本的な精神や社会的な役割については手本にすべき点も多いように思う。

著者は民法学者であり，本書は制度的な面を中心に公益活動を論じているが，単に制度論に終らず制度を作り出した背景や，活動内容についても言及している。フィランソロピー活動理解のための必読の書と言えよう。

(勁草書房刊 3,300)（山岡記）

ニュースレター特集号のご案内

財団の事業助成として行ってきた「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成による刊行物もすでに20冊以上になりました。そこで「隣人プログラム刊行物紹介」と題して，ニュースレターの特集号を発行することにいたしました。第１号はタイ特集として「ソーイ・トーン」「タイ民衆生活誌」「田舎の教師」「タイからの手紙」「王朝四代記」「東北タイの子」「魔物」「生み捨てられた子供達」「未来を見つめて」「地下の大佐」の10件をとり上げて紹介いたします。

ご希望の方は官製ハガキに「隣人プログラム刊行物紹介希望」と明記の上，財団レポート係までお申し込み下さい。無料でお送りいたします。

編集後記

▶ヤマハ発動機(株)が創業25周年を記念して，このほど「公益信託ヤマハ発動機国際友好基金」を発足させました。公益信託としてはわが国最大の三億円を基金とするもので，日本人学生の海外留学費援助，在日外国人留学生の奨学援助，交通論に関する研究助成が主な事業だそうです。活躍を期待いたします。

▶本号から「助成主査」にかえて「プログラム・オフィサー」の名称を用いることにいたしました。(→Ｐ２)プログラム・オフィサーの主な仕事は，助成に値する研究や事業を，種や芽の段階で発掘してきて育てることなのですが，このような職能を表現する日本語がないため，今まで曲げて「主査」をあてはめてきました。しかし誤訳で通すよりは……というので先の次第となりました。

▶中山茂氏の「転換期の科学観」(日経新聞社'80)の中で，アカデミズム科学，産業化科学の次に来るものとして，社会への貢献を目ざし社会一般を評価者とする「サービス科学」が提唱されていますが，このようなサービス科学的研究活動のための財政的基盤として民間助成財団の役割を位置づけることができるのではないかという感想を持ちました。

トヨタ財団レポート　No.13
発行日　昭和56年３月27日
編集発行　財団法人　トヨタ財団
（担当　久須美雅昭）
印　　刷　㈱八重洲企画